部下が自慢していた嫁を
夫のためと勘違いさせて
調教してあげた話
～オモテ～
基本CG 14+6枚
本編 120枚
おまけ 165枚

失敗した。

上司に誘われて投資に挑戦したはいいものの、
見事に大失敗。
妻に内緒で貯金を使っていたけど、その数倍の額の
損失をだしてしまった。
いきなりの借金生活の危機。
新しい家に引っ越しをしたばかりでなにかとお金が
必要な時に大変なことをしてしまった。

そんな話を投資に誘った上司にしてみると、なんと彼は
自分とは逆に大きく成功しかなり儲けたらしい。
うらやましい限りだ。
こっちはどうやって妻に打ち明けようか
悩みっぱなしなのに…。

そんな僕を見かねてか、
彼が「助けてあげようか」と言ってきた。

「投資をしてみないかともちかけたのは私だからね。
責任を感じるところもあるし、大事な部下だからね」
「本当ですか!? 助けてくれるなら
本当にありがたいです。ぜひお願いします」

決して少なくない金額の損失をすべて払ってくれる
というのだから本当に驚きだった。

「でも…本当にいいんですか?こんな大金…」
「こっちはその額以上に大儲けしたからね。あぶく銭だし、
全部払っても全然余裕があるから」
余裕な感じで笑い、とてつもなくうらやましいことを言う。
「それにしてもそんなやり方をしていたとは…」
「よく君が話をしてくれる自慢の嫁さんを
悲しませるようなことをしちゃダメだよキミ」
「うっ…はい…」

普段からついつい僕の妻である育代について惚気話を
してしまうせいか、時々こうしていじられるのだった。

それからしばらくして酒も進み、結局いつものように
妻の惚気話をしてしまっていた頃――――

「それにしても夫婦仲がよさそうで本当に
うらやましいね。私も別に仲が悪いわけじゃないが、
そういう情熱はもうないなぁ」
「そうなんですか？」
「そういうものだよ」

今の自分には全く想像できない。何年たっても
嫁のすべてがかわいい。色々と支えてもらっている。
感謝の気持ちと愛情が薄れるなんて考えられないのが
正直なところだ。

「ああそうだ、君の損失を肩代わりする代わりと
いってはなんだけど」
急に思いついたような口調で話を振ってきた。
「君の嫁さんを今度紹介してくれないかな」
「えっ」
「こんな若い美人さんと関わりあうことなんて
あまり無いからね。ちょっと話をしてみたいなと思っていたんだ」

僕のスマホの待ち受け画面に映る育代の写真を
見ながら彼が話す。
「若いって…もう僕も妻も三十半ばですよ。若くなんて…」
「ははは、私から見れば十分若いよ。……で、どうかな？」

「えーと、それは……」
別に何があるというわけでもないだろうけれど、
あまり気乗りしない話だった。

「嫌かい？」
「まぁ嫁さんが浮気するかもしれないと思うのはわかるが――」
「育代はそんなことしませんよ！」
妻を軽く見るような言葉にムッとなり、
つい強く否定してしまう。

「本当にそう思っているなら、私と会って少し話を
するくらいいいだろう？
私と君も短い付き合いじゃないんだし」
「……まぁ、そうなんですけど」
「ま、それだけ嫌がるのもものすごく愛しているって
証拠なのかな？　悪いことじゃないんだろうさ」
またいつものように妻への愛をいじられる。

「…わかりました。
もともと助けてもらう側ですし……いいですよ」
「おっ」

「ただ……期待しているような反応がなくても
怒らないでくださいよ？」
「育代は僕意外の人と付き合ったこともないですし、
見た目の雰囲気と違ってしっかりしてますから
あくまで夫の上司としての話し相手にしかなりませんよ？」
「何を言ってるんだ、そりゃ当り前じゃないか。
妙な期待なんてしてないよ」
早口になっている僕に、さらっとそんな言葉を返しつつ
次に頼むお酒を選んでいる。

「でもまぁ、もし話が合ってデートをするようなことに
なっても許してくれよ」
「ははは、別にいいですよ」
わざとデートを強調し、冗談っぽく話す彼の言葉に相槌をうつ。
「まぁ、僕たちはお互いべた惚れですから間にはいるのは
難しいと思いますけどね」
「ほほぉ、言うねぇ」

その後もお互いに挑発しあうようなふざけた会話を
しながらお開きの時間になった。

帰り道、勢いで約束してしまったことを思い返し、
後悔の気持ちがあふれてくる。

結局、売り言葉に買い言葉のような感じで、
上司に嫁の育代を紹介することになってしまった。
しかも理由をつけて2人きりで会うように、
僕から仕向けるという形で…。
更には、はじめは一度だけという話だったのに、
金額の大きさの話を持ち出されて、
5回も会う機会を作るという話になってしまった。
一度会わせてくれるごとに5分の1ずつ支払ってくれるらしい。

「失敗したなぁ…なんであんなこと約束しちゃったんだ…」
負い目があるにしてもちょっと軽率だった。
自分の失敗をごまかすために育代に同意をえないまま
勝手に話をすすめてしまうなんて…。
改めて考えるとひどい話だ。

『家族には言えないなぁ……こんなこと…』

『……でもこれで悩んでたことは解決するんだよな』
育代に最近様子が変だと心配されるほど悩んでいたことが、
思わぬ助け船で解決しそうなのは確かだった。

『僕の育代に限って、ほかの男と変な関係に
なる心配はないしなぁ』
ましてや僕の知っている上司だ。絶対にありえないと言い切れる。
そう考えるとこちらが損をすることなんて全くない。
むしろ僕の嫁と少し話をするだけで大金をだしてくれる
上司は本当に人がいいだけに思えてくる。

『――――案外、あの条件も僕に負い目を
感じさせないためなのかもな』
いままでの仕事上での付き合いや信頼も手伝って、
上司の言動を肯定的にとらえる気持ちが強くなる。

家に着くころには、不安に思っていた気持ちは
すっかり晴れ、ただ悩みが消えた喜びだけが残っていた。

「ただいま――!」
「おかえりなさい!お父さん!」
「おかえりなさい博司さん。今日はずいぶん機嫌がいいのね」
「そうかな？　まぁちょっとうれしいことがあってね――」

愛する妻と娘に迎えられ、改めて幸せを感じる僕なのだった。

「…ただいま」

誰もいないアパートに帰ってきた私は、
誰もいない室内にむけて習慣付いた挨拶をする。
嫁とはだいぶ前から別居生活となり、
近頃は返事がないことに寂しさを覚えることもなくなった。

とりあえず今日は良いことがあり気分がいい。
オナりたいところだが…今日からしばらくは禁止だな。
今後のことを考えると溜めておいたほうがいい。
この気分のままさっさと布団にはいろう。

布団の中で今日のことを思い返す。
美人の嫁をもらっていつも惚気話をして…
いい部下ではあるがプライベートの境遇については
内心イラつくことが多かった相手。

そんな彼が投資に失敗して大損、助けが必要な状況になった。
助けてもらう代わりに愛する嫁を知り合いの
男に差し出すことになってしまう…ふふふ。

『損をするように仕向けたのは俺だけどな』
口元がにやける。

正直、ここまでうまくいくとおもってなかったが、
天は私を見捨てていなかった。
嫉妬心から彼に痛い目を見せてやろうと
ヤバそうな投資を勧めてみたところ
なんの疑いもなく話に乗ってくれた。
私をそんなに信じてくれていたとは嬉しい限りだ。
結果、彼は予想以上の損をし、私を頼らざるを得なくなった。

さて、あとは偶然が重なって生まれたチャンスを
モノにするだけだ。
うまいこと言いくるめて一回でもセックスしてしまえば
どうにでもなるだろう。
弱みをどんどん増やして、逃げられなくすればいい。

そうなったらあとは飽きるまでたっぷりと楽しむだけだ。
旦那以外経験が無いらしいが…

『俺が旦那以外のチンポを欲しがる
ドスケベ女に変えてやるからな、育代…！』

それから数回、何度か彼を酒に誘った。
交渉をうまく進めるための材料を集めるためだ。
こちらのおごりでしっかりと酔わせ、
上機嫌にさせて使えそうな話を引き出した。

そして――――
準備が整った俺は、彼に連絡をした。

「今週中にでも約束の件、セッティングしてくれるかな？」
「わかりました。妻に僕から言っておきます」
「1度目ってことでいいね」
「はい」

あとは用意した材料でうまく堕とせることを祈るだけだ。

私の名前は育代といいます。
愛する夫とかわいい娘がいるごく普通の主婦。
つい最近新しい家への引越しを終えて、
穏やかで幸せな生活を送っています。

近頃、夫の博司さんが妙にそわそわしています。
理由を聞いてみても詳しくは教えてくれません。

ある日、妙な連絡がありました。
「会ってほしい人がいる」

いきなりの話。
理由を聞いてもはっきりとしない感じでごまかされてしまった。
とにかく会って話をしてほしい、とのことで――。
博司さんがこんな頼みをしてくるなんて
今までにないことでした。
きっと何か言いづらい事情があるんだと思い、
とりあえず承諾しました。

夜遅く。
娘も2階にあがって寝てしまった時間。
博司さんから連絡があったとおり
家に男の人が訪ねてきました。

彼は博司さんの上司で、いつもお世話になっている人らしい。
なぜ急にそんな人が来たのかはわからないけど、
博司さんが帰ってくるまで私が相手をすることになりました。

お茶を出し、あたりさわりのない雑談をする。
そんな時間がしばらく続いた後、
彼は言い辛そうにある話を切り出してきた。

「今日お宅を訪ねた理由なんですが…実は彼に、
特殊な性癖があって悩んでいると相談されましてね」
「……は？」
「自分の嫁が他の男に抱かれているところが見たい、って」
「……あのですねぇ」

唐突にとても不愉快な話をされ、博司さんの
上司であることも忘れてとげのある声がでてしまう
『博司さん、なんでこんな失礼な人を家に…』
そう思う私をよそに、かまわず話をつづけてくる。

「まぁこんな話をされても、そんな顔になりますよねぇ」
厳しい表情になる私を見て、苦笑している。
「こんな趣味、人には言えませんからねぇ…まして家族には。
あなたにはずっと隠してきたらしいんですが…」

「博司くんから聞きましたよ。
もう長いことセックスレスだとか。」
『…っ、なにを言ってるんですか』
『たしかにもうずっと…してないけど』
「この話、そのことにも関係してるんですよ」

初対面の人から夫婦の性生活について
話をされるなんて思いもよらなかった。

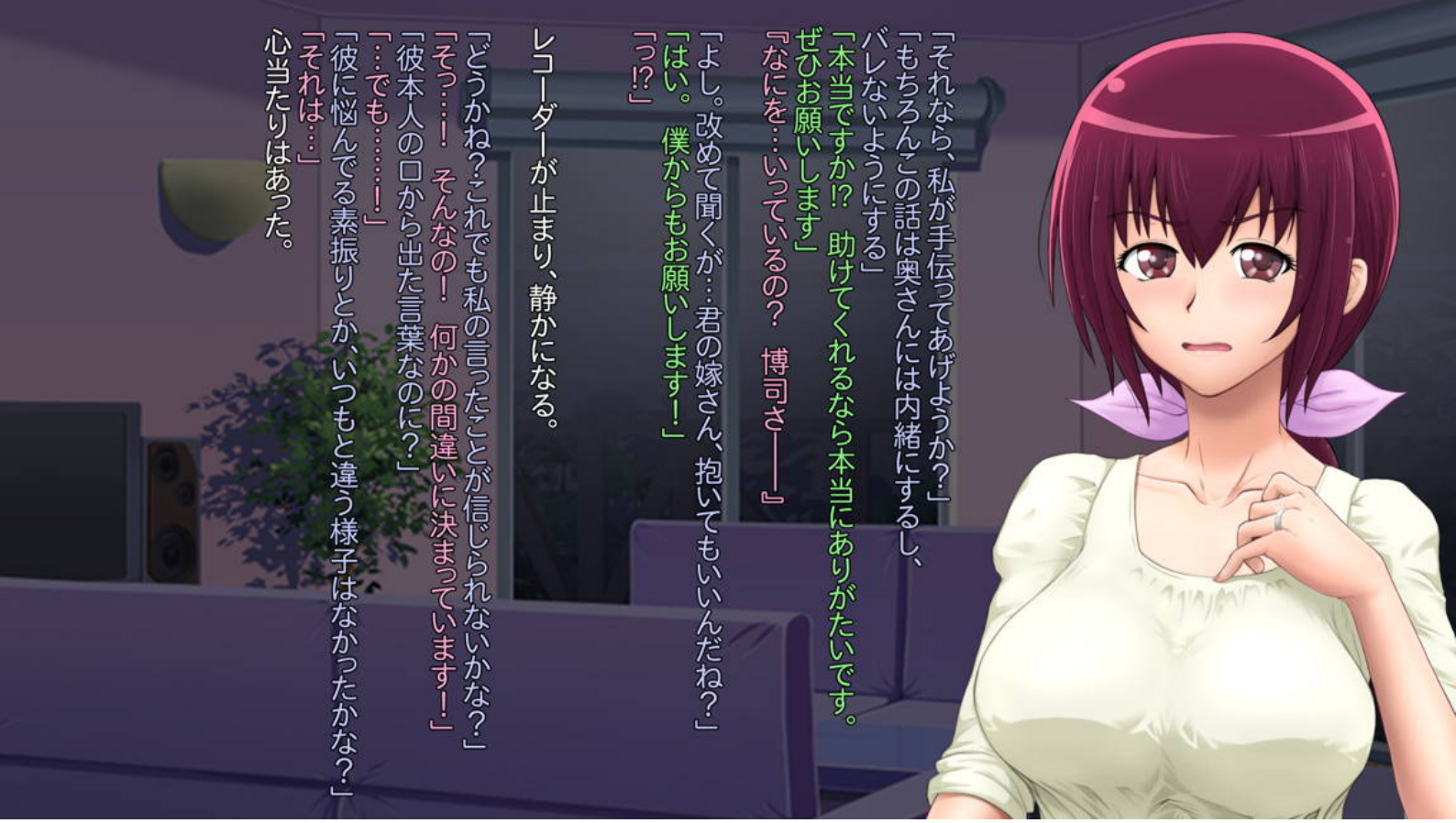
「普通のセックスではマンネリで――」
「そのせいかあまり勃たなくなってきたそうで――」
「刺激が欲しいと彼に相談されて――」
「――ということわけで私が君と
セックスしてほしいと頼まれたんですよ」

到底理解できない話をぺらぺらと話す男に、嫌悪感が高まる。

『私がこの人と浮気することを望んでいる…？
博司さんが？』
ばかばかしい話すぎて聞く気にならなかった。

「お話はそれで終わりですか？」
「む……」
「そんなこと、到底信じられません。
夫の上司の方に失礼なことは言いたくありませんが…
もう帰っていただけますか。
今日のことは聞かなかったことにしますから」
怒りをできるだけ抑えて、はっきりと告げる。
「ふむ…うーん……」
さすがに相手も空気を察したのか言葉に詰まっている。
「…わかりました。では最後にこれだけ聞いてもらいたい」
そう言って彼はボイスレコーダーを取り出した。
「彼の名誉のためにも、これをあなたに聞かせたく
なかったんですが…信じてもらえなければ
どうすることもできませんからね」
『博司さんのために…？』
拒否する間も無く、再生がはじまった。

2人の声が聞こえる。
声は…博司さんとこの人のようだった。
夫婦の性生活についての話をしている。
『博司さんったら、なんでそんな話をこの人にしてるの…？』
恥ずかしさに顔が熱くなってくる。
「最近は嫁さんとはセックスしてないのかい？」
「そうですね、もうそういう目じゃ見れないっていうか…」
「え…」
聞き間違いだと思いたくなる言葉に驚き、声が漏れる。
「まぁ趣味は人それぞれだからね…
嫁さんには言えないこともある」
「そうですね…」



「それなら、私が手伝ってあげようか？」
「もちろんこの話は奥さんには内緒にするし、バレないようにする」
「本当ですか!? 助けてくれるなら本当にありがたいです。ぜひお願いします」
『なにを…いっているの？ 博司さ――』
「よし。改めて聞くが…君の嫁さん、抱いてもいいんだね？」
「はい。僕からもお願いします！」
「っ!?」
レコーダーが止まり、静かになる。
「どうかね？これでも私の言ったことが信じられないかな？」
「そっ…！ そんなの！ 何かの間違いに決まっています！」
「彼本人の口から出た言葉なのに？」
「…でも……！」
「彼に悩んでる素振りとか、いつもと違う様子はなかったかな？」
「それは…」
心当たりはあった。

「と、とにかく、本人に確認してみます。
今日はもう帰ってください！」
「やれやれ…」
大げさな溜息をつきながら――
「君に言いづらいからあれだけ悩んだ末、
私に相談してくれたのに…
彼の気持ちを考えてあげられないんだね。少し同情するよ」
暗に、私が夫の気持ちを汲めない酷い妻だとでも
言いたげな言葉だった。

「まぁいいさ。今日はもう帰るとするよ。博司くんによろしく」
「……わかりました」
「あぁ、そうだ…彼がああいった性癖ということは
知らないふりをしてあげてほしい」
「……」
「彼の悩みを解決してあげたくてつい言ってしまったが…
本来、秘密にするはずだったんだ。
彼との信頼関係が崩れて仕事に支障が出るかもしれない。
それに何より…君に絶対知られたくないと
言っていた彼が傷つくからね。じゃあ。」

（バタン）

拍子抜けするほど簡単に、彼は家を出て行った。
残された私は……さっき聞いた言葉を改めて思い返していた。

「ふーっ…ミスったかな」
帰りのタクシーの中で脱力する。
もっと簡単に言いくるめられると思ったが、あの嫁、
案外ガードが固かったな。

ここのところ酒に誘ってはネタになりそうな発言を
彼から引き出して、都合よく編集をして…
ツギハギだらけの、なんとかでっちあげた切り札の
ボイスレコーダーだったが、どれだけ効果があったか……。
『また別の手を考えなきゃならんかな…
もう警戒されて厳しいか…？』

とりあえず彼に連絡をする。
「今日はもう帰ることにするよ。君は良い嫁さんを
もらったね。とても楽しい時間を過ごせた。
約束した分のお金は明日にでも払っておくよ」

簡単な連絡を終え、目を閉じて思案する。
今日の感じだと金の払い損に終わりそうな状況だ。
さっきの話も旦那に全部話してしまうかもしれない。
『素直に借金を払う代わりに嫁のカラダを
差し出すように取引するべきだったか？』
だがそれだとせいぜい数回しかヤれない上、
風俗で女を買うのとあまり変わらないからなぁ…。

「どうしたもんかねぇ…」

しかし諦めきれない俺は、次に会った時の
交渉方法を考えることにした。

「ただいまー」
玄関から博司さんの声が聞こえる。
リビングにきた博司さんは機嫌がよさそうだった。
それとなく理由を聞く。
「今日会わせた人、僕の上司だって言っただろ？
あの人にちょっと悩みを打ち明けてね。
それが解決しそうなんだ」
「悩み…」
あの人から聞いた話と一致する。
「解決しそうならよかったわね。
で、どんな悩みだったの？聞かせてくれない？」
「いやぁ、それがその…この悩みっていうのがちょっと
恥ずかしい話で…育代には相談できなかったんだ」
くちごもる博司さん。
「……どうしても教えてくれないの？」
「ごめん、詳しくは言いたくないんだ…ほんとごめん！」
「そっか…うん、わかった」
『それって…私にあの人と浮気してほしいっていう話だから？』
はっきり聞きたい気持ちをグッと飲み込み、探りをいれる。

「でも相談にのってくれたっていうのはわかったけど…
なんで急にあの人のことを私に紹介したの？」
「いや、それはその……」
また何かをごまかすような感じになる。
「代わりというか、んー！…と、
悩みを解決してもらうために仕方なくというか…」
「とりあえず根はいい人だよ。
変わったところとか厳しいところもあるけど
大変な時はちゃんと助けてくれるし、約束も守ってくれる。
育代もあんまり嫌わないでほしいな」
明言を避ける博司さん、それに妙に彼をもちあげる言葉…
それらが、彼がいっていた博司さんの隠された望みと
結びつくように感じられてしまう。
『まさか…本当に？』
震えてしまいそうになる唇を抑えつつ、できるかぎり
平静さを装って聞いてみた。
「私があの上司の方と会うことが、その…
博司さんの悩みの解決に役立つ…の…？」

「そうだね。しばらくはあの人に
付き合ってもらえると助かるかな」

「……そう……うん、わかった。
博司さんがそう言うなら」
ぎこちなく笑いを浮かべて、席を離れる。

それ以上は、怖くて聞けなかった。
例の会話を私が聞いてしまったことは
気付かれたくなかったし…
何より、「ほかの男に抱かれてほしい」なんて話が
博司さんの口からでてしまったら…
きっとものすごくショックで…辛くて泣いてしまう。

もしかしたら彼が言う通り、博司さんはこれまで
我慢していたのかもしれない。
ここ最近、ふと目を向けると辛そうな顔をしているのも、
もうずっとエッチのお誘いがないのも、全部……

「私が悪かった…の、かな……」

良き妻だという思いは自惚れだったのかもしれない
と思うと、視界がにじんだ。
しばらく思い悩む日々が続きそうだった。

数日後。
また博司さんからの連絡がきた。
前と同じ…あの人と会ってほしいという連絡。
結婚して15年以上になるけど、これほど
不自然なことは今までなかった。
『そういうこと…なの？』
最後の望みをかけて、断れないか聞いてみる。
「気が乗らないし、できればもう会いたくないな……
断っちゃだめかな？　どうしても会わなきゃダメ？」
私が知っているいつもの博司さんなら…返事は……
「無理をいってごめん。でも僕を助けると思って。
な、頼むよ！」

「こちらこそごめんなさい。
やっぱり会ってみることにする。
わがまま言っちゃってごめんね。」

（ぱんっぱんっぱんっ）
録画状態になっているスマホの前で、
私は博司さん以外の人に抱かれていた。
「どうです奥さん、夫以外のちんぽは」
「……っ、別にっ…何も言うことなんて…んっ、ありません」
「おや？　最初に見たときは驚いていたようですがねぇ」
「…そうですね、っ、無駄に大きくて…痛くて…
早く終わってほしいです」
「ははは、そうですか！　私はとても気持ちいいですよ」
「……」

彼が後ろで腰をお尻に叩きつけてくる。
そのたびに長くて太いアレが中を圧迫してくる。
『ほんと…キツ、い…っ』
博司さんとのセックスとは違い、限界まで押し広げられる感覚。
痛みばかりが気になるこの行為は最悪の気分だった。

「それにしても……夫の特殊な趣味のために
好きでもない男に抱かれるなんて
あなたは本当に夫想いの奥さんだ」
「くっ…そんな話は…いいですから…！」
『はやく、おわって…っ！』
アソコからの痛みと、博司さん以外の男に犯されている
という痛みを、ぎゅっと枕を掴んで耐える。
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ズチュッ
グチュッ
ゲチュッ
!!
だめ？
外に…っ
「くうっ…！　ダメだ、そろそろ出るっ！」
（ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！）
動きが早くなり、アソコを彼のモノで乱暴に
「痛…あっ、だめっ！　中じゃなくて外に…っ！
絶対だめですよっ！」
「くっ！ぁぁぁぁ！　奥さん、奥さんっ！」

（ビューッ！ビュクッ、ビュクッ！）
「おおっ、くうーっ！でるでるっ！」
「あ…うそ……やだ…」
ドプッ
ドプ
お尻に体重を思いっきりかけられたまま彼の動きが止まっている。アソコの中には熱く気持ちの悪いものが広がっていた。
『いや…いやいやいやっ…!!嫌だよぉ…博司さん…っ』
ビュー!!
ビクッ!
ビュ!!
ぶるぶる
ぶるっ
はーぁ♥
あっ
あ…うそ…なかに…
やだ…いやぁ…
「ううっ…ひどい…ぐすっ…中には出さないって…！約束だったのに…！」
「すみません、奥さんのマンコが気持ちよすぎてついね。出そうになったら止まれないものなんですよ」
いまだに腰を押し付けたまま、全く悪びれない様子で言う。

（グポォッ……）
ようやく抜いてくれる。
アソコから精液が溢れていくのが見なくてもわかる。
『こんなにいっぱい…こんな人のが、中に……』♥
「うううう〜〜っ!!」
汚されてしまったことを強く自覚させられて
堪えようとしても泣けてしまう。
「大丈夫ですって、避妊薬なら用意しますから」
「ううっ…そういう問題じゃ……」

「元はといえば、奥さんが用意したゴムが小さすぎるせいですよ」
「……あなたがおかしいんです…っ!」
私が買ってきたコンドームは……
博司さんとのエッチの時に使っていたサイズは、
彼のアレには全く入らなかった。

「おっと、あまりゆっくりしてると帰りが遅くなってしまいますね」
グチュ
ヴジュッ
タプッ
タプッ
ぱんっ
ぱんっ
「あともう一発、パパッとヤらせてもらいますね」
「えっ、いやっ！1回したら十分でしょ……ああああっ！」
ブチャッ
ブチュッ
グリチャッ
グチッ
こちらが言い終わる前に、精液でドロドロになってしまったアソコに、またアレがはいってきた。
まだ…!?
いや…
きゅっ
くっ…うう…
ふっ
はぁ♥
ぱっ♥
「あー、ほんと…グチョグチョな上に締まりがよくて、イイですよ」
（グチャッ、グジュッ！グチャッ！ブジュッ!!）
「くっ…うっ…うううう……」
精液が膣内でかきまぜられ、泡立つような音が響く中、嫌悪感を必死に耐える時間がまたはじまった。

その後、自分勝手に動き続けた彼は
気持ちよさそうに2度目の射精を迎えた。
今度は約束したとおり外に…。
「…どうです？ 今度はちゃんと約束を守りましたよ」
『もう意味なんてないって…わかってるくせに……』
この男の汚らしい精液がお尻の上にかけられる。
『中だけじゃなくて肌までこの人のが……』
まるでマーキングされているような気がした。
その感覚の気持ち悪さに寒気がし、また涙が出る。

行為が終わった頃には、私のお尻とアソコは
彼の精液がついていない場所がないほど
ドロドロに汚されていた。

（ザアアアアアアアア）
『やっと終わった…』

事後、彼はさっさと帰ってしまった。
私はというと、一刻も早く身体の汚れを
落としたくてシャワーを浴びはじめたのだった。

『こんなことになっちゃって…本当によかったのかしら』

博司さんが望んでいるという話を信じることにして、抱かれてしまった。
その事実が、時間が経つにつれ私の心に暗い気持ちを生んでいた。

帰り際、あの人が念を押していった事があった。
それは、この関係について私から博司さんには言わないようにとのことだった。

「浮気したことを夫に話す妻がいますか？
それじゃあ不自然すぎて興ざめです。
あくまでも奥さんは彼の趣味を
知らないことにしないとダメなんです」

ザアアア

「彼は何も知らない奥さんが
他の男に抱かれて欲しいんです。
もし言ってしまったら、
我慢してセックスしたことも
無駄になってしまいますよ」

今日の動画は早速博司さんに渡す約束になっているらしい。
私を普通に口説き落とすことに成功したという事にして……

『もし全てが勘
ただの浮気動
そうだとしたら
すごく怒って非
そうなったら…
必死に謝って…

『……まだ入ってるような感じがする』
痛いほど大きく太いアレを入れられたせいか、
まだ違和感が残っている。

じわ…

あは…は……っ

「あっ…」
（コポッ……）

しっかり洗ったつもりだったのに、アソコからまた精液が溢れてくる。
あの人に奥まで汚されたという事実がつきつけられる気分だった。

「……
きれい
汚れを
まだ時

普段よりもずっと長いシャワーを終えた後。
いけないことをしてしまった罪悪感で胸がいっぱいになり
何も手につかずリビングをうろうろしていると……

「ただいまー」

博司さんが帰ってきた。
『もうあの人とのこと、知ってる…のよね』
一体どんな反応をするんだろうか。

あんなこともうしたくない。
あの男が言っていたことは全部間違いであってほしい。
でもそうしたら…今日私がしたことは…

二つの思いがせめぎあっている。
そして博司さんがドアを開けてリビングにはいって――

「あはははは」
テレビを見て笑う博司さん。
拍子抜けするほど普段通りだった。
違いといえば…朝よりも機嫌がよさそうなことくらい。
『なんで？ あの人から今日のこと見せられたんじゃないの？
わたし、すごく嫌だったんだよ…？
それなのに、何も…言ってくれないの？』

本音を言えば……僕が間違っていた、
もうあんなことしなくていい、って言ってほしかった。
……すこしだけ話を振ってみることにした。

「……機嫌がよさそうね」
「ん？ そう見えるかい？」
「ええ。…なにかあったの？」
「いや、前に話した悩みの話。
そういえば育代は今日、ちゃんと会ってくれたんだろ？」
「っ…！ ええ。ちょっと…会ったけど」
「おかげで悩みは順調に解決しそうだよ。
あんまり気が乗らないかもしれないけど、この調子で頼む！」
「わかった…うん、博司さんのためだもん、がんばるね」
『……やっぱり聞かなきゃよかったな』

結局、博司さんから
「もうあの人と会わなくていい」
という言葉はもらえなかった。

「くっ…ううううっ、んんっ」
(ぴちゃ…くちゅっ…)
「い…いつまで、そんなところ舐めるんですか…」
また博司さんからの連絡が入ってから2時間後。
今日は執拗にアソコを口で愛撫されていた。
足先からはじまり、膝裏、内ももを舐められた。
そして割れ目を舌でなぞったり、唇でついばんだり…
とがらせた舌で尿道や膣口を刺激したり…
敏感な突起をねぶられ、吸われ、弾かれた。
そんなことがもうずっと続いている。
くっ…
うっ
ふっ…
んん…っ
ぴちゃ…
「ふっ…う、あ、くうっ…この人にされても
気持ち悪い…だけよ、こんなの……っ」
「まだ私のチンポがキツそうだからね。
こちらは強く擦れてとても良い具合なんですが
奥さんにも気持ちよくなってもらいたいんですよ」
「そんなことされても…うっ…
気持ちよく、なん、てっ…なりませんから」

今日も前回同様、撮影しながらのセックス。
レンズがこちらに向いている緊張感にはまだ慣れない。
『せめて、はやく挿れて終わってくれたほうが…いいのに』
愛のないセックスなんて、はやく終わるほうがいい。
無駄に丁寧な前戯を不愛想に受ける。
「あなたが感じてくれたほうが、博司くんも喜ぶと思いますよ」
「なっ……！」
「この間の映像を見せた時も、そんなことを言ってましたからね」
博司さんがそんなことを？　信じられない。でも…
「そんなの…そうだとしても……すぐには無理です」
「ふむ…」
好意のない相手とのセックスで気持ちよくなんて
なれるはずがない。
……
……
たぷん♥
ぴくん…
ぴっぴっ♥
くぱぁ♥
ぐぱっ♥
びちゃ…

「……ふむ、そろそろ入れますか」
「……どうぞ」
諦めたのか、長い愛撫をようやく切り上げて挿入する体勢にはいる。
（ニュプ…ぐにゅぬぬぬっ）
「っ……う…くっ…」
『やっぱり…大きい……っ』
アソコをたっぷりとほぐされたにも関わらず、キツい。
彼のモノがおなかの奥を圧迫して苦しい。
『ほんと、おおきすぎる…のよ……！』
博司さんのおちんちんなら、
こんな苦しさを感じたこともないのに…
セックスすること自体を嫌いになりそうだった。

(ヌチャッ、グチュッ、ヌチャッ)
「んっ、んっ…うっ、……ふっ…く」
「どうです？　気持ちいいですか？」
「いいえ…っ　私のことは、結構…ですから…っ」
『ちょっとは甘い声も漏れてきたが…なかなか強情だな』
「じゃあ、そろそろ早くしていきますよ」
ゆっくりと深い動きから、早く膣内の奥を擦る動きに変わる。
挿入にあわせて時折、指で入口の上のあたりをいじられ、
痛みの中にも甘いしびれのようなものが混じる。
「は、くぅ…うんん、んんっ」
ぱちゅっ
ぱんっ
ぬちゃっ
ぱちゅっ
グチュッ
ズッ
ヌチャッ
ヌチャッ
ゆさっ
ぶるんっ
はぁ…
はぁ…
はぁ…
はぁ…
はっ
はぁ…
はぁ…
はぁ…
はぁ…

口元に力をいれてその感覚に耐えていると――
「はぁっ、はぁっ！　いくぞっ！」
（ビュクッ！　ビュ――ッ!!）
叩きつけるような射精がはじまる。

『ああ……また、中で…！』
ふとももをがっしりと掴んで腰に引き寄せ、
当然のようにアレを奥まで押し付けて射精される。
『やっぱりいやぁ…、博司さん…っ』
助けを求めるように夫の名前を思い浮かべてしまう。
こんなことを望んでいるのは…博司さんのはずなのに。

「ふぅ――――っ」
満足そうに彼が息を吐く。
（グポッ……ゴポポォ…）
「奥さんのマンコから私の精液が溢れている姿は、
やはり達成感があってエロいですねぇ」
「……」
恨みがましい目で見る私を気にするでもなく、ニヤけている。
「見てたらホラ、またこんなになってしまいましたよ」
いろいろな液体でドロドロになったアレが、
また大きくなっていた。
『ほんとなんなのよ、この人…！』
性欲の強さにうんざりする。
我慢の時間は、まだ続きそうだった。

「いやー、出した出した」
具合のいい穴でたっぷり射精できた充実感で
とても気分がいい。
適度な疲労感もあり、よく眠れそうだ。

「さて、寝る前に…」
撮影した映像をチェックする。

「ふむ…」
やはりおもったより反抗的だ。
終始、嫌そうな顔をしている。
こんな無理矢理な感じが出ている動画は…
見せられないな。
保留だ。

「ん――――…」
セックスの経験も大したことなさそうだし、もっと楽に
快感に流されると思ったんだが…

「一途な女ってのは大好物なんだけどなぁ」

さすがにこのままじゃ予定が狂ってしまう。
前に撮ったのもそうだが、こんな動画を博司に見せても
精神的ダメージを与えられない。
それどころか怒ってすべてが終わってしまう。

こんな楽しいくて気持ちいいこと、まだ終わらせたくはない。

「やっぱりアレを使うしかねぇかー」
できれば使いたくはなかったが、時間がない。
この前注文し、届いたばかりの小包を開ける。
中にはビニールつつまれた錠剤と粉末。
怪しいルートから、なかなかにお高い値段で買った
秘密のアイテムだ。

ひとつは感度を高め、痛みも快感に変えてくれる、
いわゆる媚薬。
未開発の性感帯もヒラいちまうらしい。
なかなか強いやつで、イきすぎに注意なんて
書いてあったが…本当かね？

もうひとつは意識が朦朧と…まぁ夢見心地になるやつ。
ちょっと前後の記憶がとんじまうらしいが、
今回は好都合から良しだ。

どちらも依存性はない…らしい。
が、こういうものは使い過ぎたら体にはよくないだろう。

「まぁ、ちょいちょい使うくらいなら大丈夫だろ」
錠剤を砕いて粉末状にした後、
もうひとつのクスリと混ぜ合わせる。
よくわからんが、一緒に使ったほうが効果的だろう。
べつに禁止とも書いてなかったしな。

「期待に応えてくれよ～」
次に会ったときはこっそりコレを飲ませればいい。
そうすれば「使える」映像が撮れるはずだ。

それにしてもわざわざこんなものまでつかうことになるとは…
俺もだいぶあの女――育代を気に入っているらしい。

もっと犯してやりたくてしょうがない。
今は嫌がってキスすら許してくれないが
俺のちんぽを喜んで咥える女に変えてやりたい。

「楽しみだなぁ～…ふふっ」
想像を膨らませ、少し前に空になるまで射精したはずの
俺のチンポはまたガチガチに勃起していた。

『そろそろ…時間かぁ……』
博司さんから連絡のあった時刻が近づく。
また…嫌な時間がはじまる。

「やぁ、また会えましたね」
「……どうも」
「おや？ 冷たいね。これからセックスするっていうのに」
「あくまで博司さんのためですから。
そうじゃなきゃこんなこと…」
「ふふ、そうだねぇ。じゃあ今日も彼の特殊な趣味のために、
仲良くハメ撮りしなきゃね」
「……」
「ふぅ～…、今日もまた、不機嫌だねぇ～…」
不愛想な私の対応に、彼が溜息をつく。

「今日はあまり時間がないんだが…
いつまでもこんな雰囲気じゃお互い辛い。
ちょっと座って雑談でもしないかな？
親交を深めるためにも。」
「はぁ……」
「いつも会ってすぐにヤってたからね…そこは謝ります。
奥さんみたいな美人とデキると思うと我慢できなくてね。
でも、いつまでも奥さんに嫌われているのは不本意なんだ。
できれば、もっと仲良くしたい。」
「……」

私にはそんな気持ちはなかった。
でも、少しでも今日のセックスの時間を短くできるなら……
それどころかうまく話を長引かせれば、
しなくて済むかもしれない。

「……わかりました。
じゃあそちらに座って待っていてください」
「あっ、おかまいなく」
「一応、お客様ですから」

少しでも時間を稼ごうと、コーヒーを淹れることにした。

『さぁて、どうやって話を長引かせ――――――……

「あっ♥ んあっ♥ はあっ♥はあっ♥」
「どうだっ！ 育代っ！ 気持ちいいかっ！」
「え…あっ♥ んんんっ！♥
き、きもちいいっ♥れすぅ…っ♥」
『あぇ…？ なんか…
フワフワする…あは…♥』
きづくと、わたしは
きもちよさでいっぱいの
せかいにいた。
「あっ♥ これ…♥ きもちいいっ♥」
わたしのアソコでおちんちんがこすれるたびに、
めのまえがチカチカするようなきもちよさがおそってくる。
「あはっ…♥ もっとぉ…♥これ、もっとしてぇ…っ♥♥」
「いいぞ、満足するまでしてやるからな。我慢しなくていいぞ」
「わかっ…たぁ…♥」
あっ♥
んあっ♥
はあっ♥
あっ♥
あっ♥
はあっ♥
いい…♥
もっとぉ…♥
ビクッ♥
ぱぁ♥
ぐるぐる♥
ぐるぐる♥
ぐるぐる♥
ビクッ♥
ビクッ♥
バチュン♥
キュンキュン♥
パチュッ♥
パチュッ♥
バチュッ♥
ビクッ♥
ズリュッ
ズリュッ
ゴンッ♥
ゴンッ♥
ビクッ♥
ビクッ♥

とってもあま〜いしきのなか、きもちよさだけのせかいをたのしむ。

「でるぞっ！」

「ふあぁっ♥　あああああっ♥」

すごいいきおいでしゃせいで、かおにまでせいえきがかかる。

「いっぱい…あったかぁい…♥♥」

なめるとおいしくて、くちのなかにもしあわせがいっぱいになった。

「あは。はははっ♥　ふふふふっ♥♥」

「こりゃやばいわ…キマっちゃってるな、完全に。次使うときはもっと少なくていいな」

「もっと、もっとぉ、もっときもちいいのしてぇ…♥」

「俺のチンポが馴染むくらいガンガン犯してやるからな！」

「はやくっ　おちんちん♥　おちんちん♥いれてっ♥　はやくぅ〜♥♥」

「理性とばして一皮むいたらとんだ淫乱じゃないか。なぁ聞いてんのか？　育代ぉ」

あっ♥♥　キたっ♥♥♥
またおちんちんキたぁ♥♥
「とろけた顔してんなぁ
そんなに俺のちんぽがイイか？」

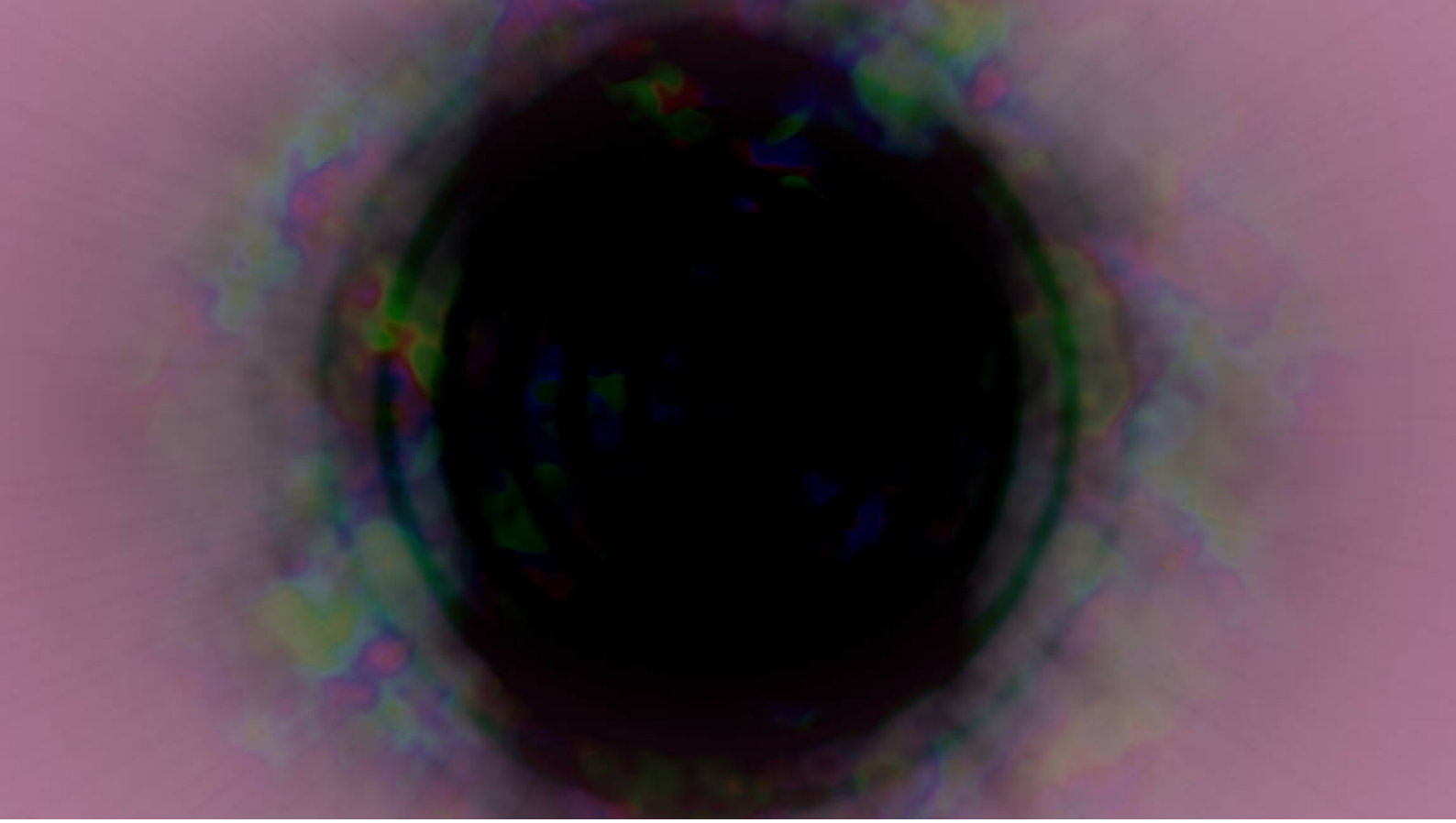
「あっ♥　ひっ♥　イイ…♥
おっきい…♥　きもちいい…♥
すきぃ～♥　せーえきもいっぱい…
このおちんちんすきぃ♥」
「博司が聞いたら泣いちまうぞ」

…なんでうごいてくれないの？
はやくキモチイイのほしい…
おなかのおくずんずんしてほしいよぉ…

「ねぇはやくぅ…おちんちんうごかしてぇ～…」
「おっと、夫の話より今は浮気エッチだもんな」
「ねぇ――え～～っ…はやくっ♥　はやくぅ!!♥」
「ほんっと、俺のでかいちんぽが好きだねぇ、育代は。
…よし。望み通り、いくぞっ！」

（グチャッ！グチュッ！ブチャッ！）
「おっ！♥♥ あ♥あっ♥あっ♥
おっ♥ おちん♥ちんっ♥♥
んあっあぁぁ♥♥」
「ほらイけっ！
俺のちんぽでイキまくれっ！」
「あっ！おっ♥ おくぅっ♥
イイいいイイイイイィっ♥♥」
イクッ、イクイクイグぅ！！〜〜っっっ!!♥♥」
「もっと!!イけっ！デカチンで膣内イキする
エロマンコになっちまえ!!」
（グチュグチュグチュッ!!）
「あアァぁ♥♥あぁぁアぁぁぁ♥あぁぁアアア♥♥♥」
「！！！♥♥〜〜〜〜♥〜っ♥っっ♥♥♥」
ぶるっ
ぶくん
ぶっ
ぶっ
ぶっ

すご♥…いよお…♥♥♥
こんなスゴイの
しんじゃう…うあ――
――……
キャーン
ガクガク
ガクッ
あっ
ガ…
ぐりん。
ぴゅ～～
ぴゅ～～
ぴゅ～～



「うぅ…あぇ…？」
次に気が付いたときはベッドの中だった。
「ここ…は…おうち…？」
頭がボーッとして思考がまとまらない。
「わらし…なにを……」
あの人と会って…それから…
どうしたんだっけ…

「ん……あぁ、起きたんだね」
「ひろし、さん…」
「いいから、今日はもう寝て」
隣で添い寝してくれている博司さんが
やさしく頭を撫でてくれる。
うれしい。

『そっか…今日はもう休んでいいんだ……』
よくわからないけど、すごく疲れていた。
「うん、おやすみなさい……」
やさしいきもちよさに包まれながら、意識を落とす。
なんだかよく覚えてないけど…
きょうは、きもちよかったなぁ……

「それじゃ、今日もお疲れ様です」
「おう、お疲れさん」
いつもの居酒屋。
仕事終わりに軽い乾杯をし、雑談をはじめる。
酔いも回ってきたころ、自然と例の件についての話になった。
「そういえばあの約束、あと一回ですよね」
「ん？　ああ、そうだね」
「約束どおりあんなにお金…
本当にありがとうございます！」
「はは、いやいや。いいのいいの」
今のところ、育代は特に変わった様子もない。
むしろ上司と会うことには全然乗り気じゃない様子が
見て取れるくらいだ。
『変な心配はいらなかったな』
少しでも育代を疑った自分がバカみたいだ。
もうすぐ預金通帳の残高も元にもどる。
悩み解決が目前でお酒がおいしい。

「そういえば、この間はすまなかったね」
「この前…ああ！ 育代が飲みすぎちゃったことですか」
「そうそう」

「育代があんなになるのは初めてなんでびっくりしましたよ」
「いや、調子に乗ってついついお酒を勧めすぎてね。
良いヤツを買ったから、飲みながら話をね。
奥さん、無理してつきあってくれたんだ」
「ろれつが回らないくらい酔ってましたからね…あ、
そういえばお酒をのんだことすら忘れてましたよ。
『お酒ぇ…？そんあののんれない…』って」
「ははは、そりゃほんとに飲ませすぎたな」
「僕の大事な妻なんですから、無理させないでくださいよ？」
「いや、本当にすまなかった！」

「そういえば、育代と少しは仲良くなれましたか？」
「んー、ああ、まぁ…ははは。
それがその…いや、言いにくくてねぇ」
「あー…」
育代は僕以外には他人行儀すぎるところがあるからなぁ…

「な…ん……。え……？」
「ショックだろうが……こうなった。」
「あっ♥　あっ♥　んぁぁあっ♥」
「きもちいいっ♥　らめ…もっとぉ…♥
あっ！それっ♥イイっ♥」

スマホには妻の…育代のあられもない姿が映し出されていた。
結合部は遠目からでもわかるほどグチャグチャに濡れていた。
イヤホンからは甘く鼻にかかった声が、
2人の動きに合わせて聞こえてくる。
「らしてぇぇ…♥たくしゃん…らしてぇぇ…♥♥」
「あああああああっっっ♥♥♥」

「うそ…だ……こんな…」

育代が…僕以外の人と、エッチして……？
そんなことをしている様子なんて、全然なかった…と思う。
今朝だって…いつもと変わらない笑顔で……
それなのに――――

「すっごい…きもちいいのお…♡
おちんちん♡ やめないれ…もっとお…♡♡」

一度出して終わったと思ったのに。
甘えた声で次を催促する育代がそこにいた。

「うぐっ」

吐き気がこみあげてくる。

「君のことはとても愛しているようだよ。
妬けるくらいにね。
会ったときは君や家族の話ばかりしていたよ。
ただ…奥さん、コッチのほうはだいぶ
欲求不満だったんじゃないか？」
「……」
「このくらいの年の女性は
性欲が強くなるからね」

「家族としての彼女は間違いなく幸せそうだが…
女性としての彼女は満足してないようだったね」
「不憫に思って私がスキマを満たしてあげたんだ。
私もまさかこうなるとは…すまないね。
見ての通り、彼女はとても喜んでくれたわけだし、
恨まないでくれよ。」
「っ！」

反射的に手が出ていた。
「…あ！すみませ……っ」
「っう……いや…、いいさ。気にしないでくれ」

ついカッとなってしまった僕に怒るでもなく、
逆に慰めるように対応される。
唇が切れ少し血が出ている顔で諭され、
暴力をふるった罪悪感が強くなる。

「まぁ、あれだ」
気まずい沈黙を破って、再び話しはじめる。

「私がいうのもなんだが…寂しい思いをさせちゃいかんよ」

「私を責めるのはいい。しかし…奥さんを責めちゃだめだぞ。
彼女が君のような愛する夫がいるにも関わらず、
私のような男とシてしまった気持ちを考えてあげてほしい。
満たされていなかった辛さを、ね。」
「……」

その後、夫婦のありかた。
性生活の大事さについて一方的に話をされた…きがする。

でも、そんなことはほとんど頭に入らなかった。

帰宅して。
暗いままの自室で、僕はあの動画を見ていた。
「なんで…なんでだよ育代ぉ…」
苦しい。悔しい。悲しい。
だというのに、映像の中の育代は
とてもいやらしくて…
もうずっと家族として見ていたのに。
今見ている育代は「おんな」だった。
甘い声をあげて大きな声で喘ぐ彼女をみて、
僕のちんこは勃ち、パンツが濡れてしまっていた。
妻が他の男に抱かれる動画。
もう何度繰り返し見ただろう。
いつしか僕は手を動かしていた。

「なんであんなやつと…！」
なんでそんなに気持ちよさそうなんだ。
なんで僕が見たことないような顔をしてるんだ。
なんでゴムも使わずにエッチしてるんだ。
なんで…中に出されて…よろこんでるんだ。
「くそっ…！ 育代、育代っ…!!」
「くそおっ!! うううっ！」
（ビュッ、ビュルッ、ドク、ドクッ）
涙に濡れながら情けなく射精したこの時は…
人生最悪の気分になった。

何度目かの射精をして、脱力する。

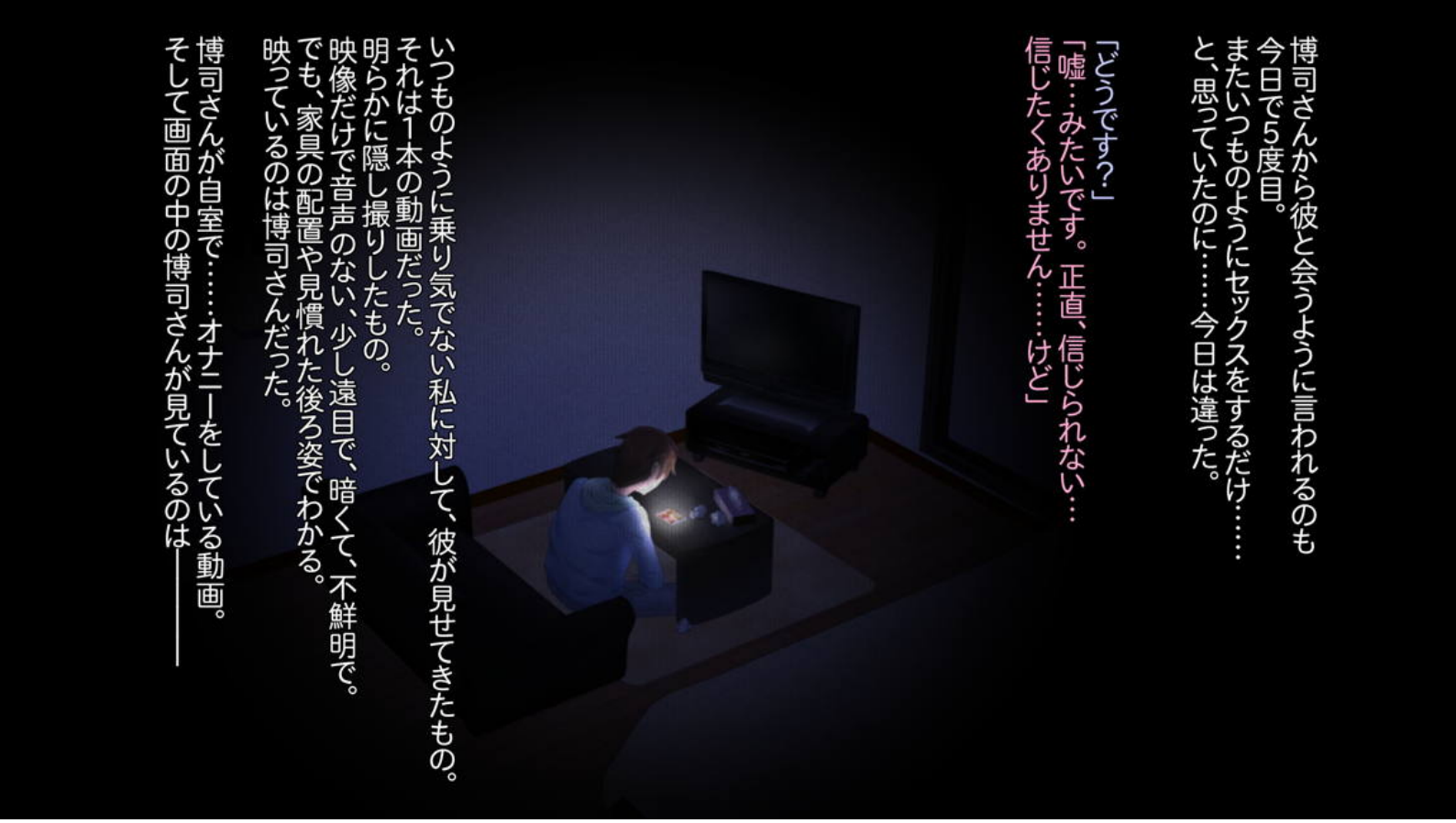
――――元はといえば、僕が悪いんだ。
僕がお金のためにあの男と会わせたりしなければ……
いや、もともと投資なんかに手をださなかったら……
自分ですべての原因を作っておきながら、育代を責めたら
「それこそ…最低の夫じゃないか……」

もし全てを育代が知ってしまったら、
こんなひどい僕を許してくれるだろうか。
正直、自信がない。だから…
一時の気の迷いであることを願うしかない。

さすがに僕の頼みも無しに育代が自分から
会いにいくほどあいつにハマっているとは…
考えられない。絶対に。
あと一回、会わせさえすれば関係は切れる。
そうしたらもう絶対に会わせない。
「全部僕のせいなんだから…
僕が少しだけ我慢すればいいんだ。
我慢すれば…。
そうすれば…すこししたら元どおりに…」

博司さんから彼と会うように言われるのも
今日で5度目。
またいつものようにセックスをするだけ……
と、思っていたのに……今日は違った。

「どうです？」
「嘘…みたいです。正直、信じられない…
信じたくありません……けど」



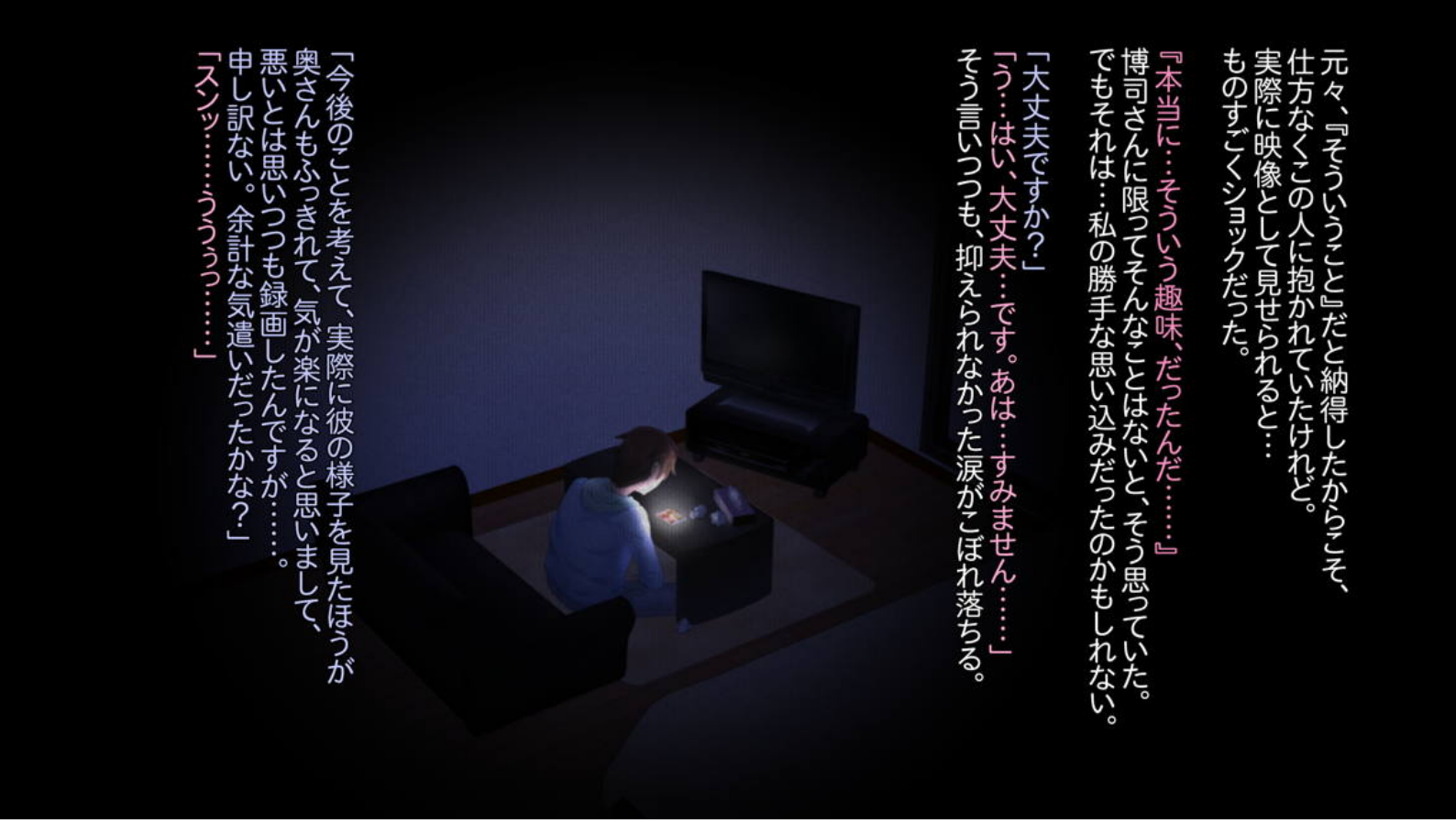
いつものように乗り気でない私に対して、彼が見せてきたもの。
それは1本の動画だった。
明らかに隠し撮りしたもの。
映像だけで音声のない、少し遠目で、暗くて、不鮮明で。
でも、家具の配置や見慣れた後ろ姿でわかる。
映っているのは博司さんだった。

博司さんが自室で……オナニーをしている動画。
そして画面の中の博司さんが見ているのは――――

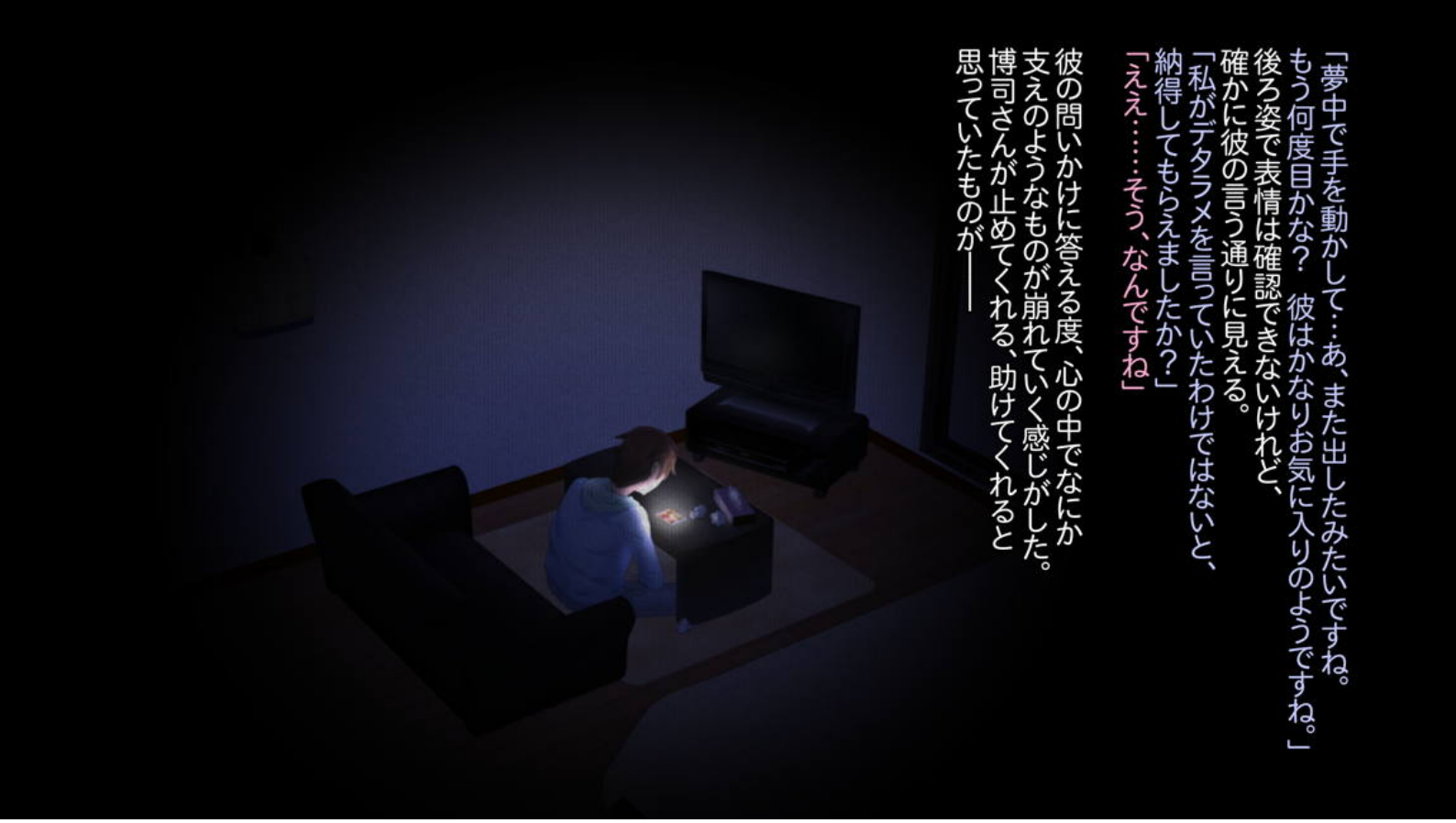
元々、『そういうこと』だと納得したからこそ、
仕方なくこの人に抱かれていたけれど。
実際に映像として見せられると…
ものすごくショックだった。

『本当に…そういう趣味、だったんだ……』
博司さんに限ってそんなことはないと、そう思っていた。
でもそれは…私の勝手な思い込みだったのかもしれない。

「大丈夫ですか？」
「う…はい、大丈夫…です。あは…すみません……」
そう言いつつも、抑えられなかった涙がこぼれ落ちる。



「今後のことを考えて、実際に彼の様子を見たほうが
奥さんもふっきれて、気が楽になると思いまして、
悪いとは思いつつも録画したんですが……。
申し訳ない。余計な気遣いだったかな？」
「スンッ……うううっ……」



「夢中で手を動かして…あ、また出したみたいですね。
もう何度目かな？　彼はかなりお気に入りのようですね。」
後ろ姿で表情は確認できないけれど、
確かに彼の言う通りに見える。
「私がデタラメを言っていたわけではないと、
納得してもらえましたか？」
「ええ……そう、なんですね」

彼の問いかけに答える度、心の中でなにか
支えのようなものが崩れていく感じがした。
博司さんが止めてくれる、助けてくれると
思っていたものが――

『うはは、こりゃあ相当効いてるな』

うなだれている育代の様子を見て内心ほくそえむ。
『こちらの望み通りの行動をしてくれたからな。
本当に素直で良い部下だよ。ありがとう、博司くん』

『さて…もう一歩追い込むか、どうするか。
さすがにやりすぎか…？』

今日見せた、夫の性癖の『真実』のほかにある秘密。
金を肩代わりした話を、金欲しさに妻を売ったように
いい感じにアレンジして伝えれば――――

『今の精神状態だと信じちゃうだろうなぁ～。
そうしたら…どうなっちゃうんだろうなぁ、
ふふ、ふふふふっ』

「奥さん、実は彼のことでもうひとつ……」

「ひじょ～に、言いにくいことなんですが……」

「悲しむあなたを見て、これ以上隠しておくことは
私の良心が許さないので――――」

やっぱり隠し事はよくないだろう？

「いいんですか？　辛かったらもうやめるように博司くんに…」
「いえ…もう、いいんです」
自嘲気味に笑いながら答える。
「そうかい？」
「ここでやめたら博司さんも残念がるだろうし…
お金を払わせてしまったあなたにも悪いですし」
「それに…」

これまでしてきた私の行動が無意味になってしまう。
ただ色々なものが傷ついただけに。

だったら――

片足を持ち上げられ、挿入の体勢になる。
アソコに彼のさきっぽが少しはいった状態。
身構えていると、彼の顔が目の前に迫ってきた。
「あ……」

「ん…ちゅ…ちゅっ……ふう、ん…ちゅぷっ」

『ああ、キス…許しちゃった……な……』

なんだか心が納得できなくて、これまではしていなかった。
でももう…拒否する理由も薄れてしまった。

『そう、博司さんのためだもん…』

「んぷぅ…いいですよ、もっと舌を絡めて…」
「ふぁい…はむ、ん、んぁ……ぷちゅっ」

「んんんっ！ ふぅぅ…んんんっ！」
（ググググッ）
「んく、うぅっ、ふぁあ、は…あ…ん、ちゅ」
キスをしたまま、ゆっくりと挿入がはじまる。

『今日も…いや、違うかな。これからずっと…
博司さんがもうやめてって言ってくれるまで、
頑張って我慢しないと……！』
アソコが、入口から順に限界まで広げられていき
下から突き上げるような形で奥まで挿入される。
『う、んん…？ あれ……？』
身構えていたおかげか、苦しさはいつもより少なく感じられた。

「今日はいつもよりお疲れでしょうから、
少し優しくいきますよ」
（ぐちゅっ…ぐちゅっ…ずちゅっ…）
「はっ…はっ…はっ…うっ…くぅぅっ」
ゆっくりではあるが確実に入口から奥までの
抜き差しを繰り返してくる。
動きにあわせて膣内全体が大きなおちんちんの形に
変形しながら擦りあげられる。
いつもならペースアップするはずのピストンだけど、
今日は同じペースが長い時間続けていた。
ぐちゅ…
ぐちゅ…
ズプッ…♥

「く、ふうっ……んっ♥ はっ、はぁあっ」

『…やっぱり、なんか、ぁ♥ おか、しい……？』

今までとは少し違う…

おちんちんの圧迫感や苦しさと同じくらい、

痺れるようなムズムズするような

感覚が生まれ腰を震わせる。

一度その感覚を自覚した後は、

どんどんそちらに意識が向いてしまう。

「なん、で…あっ♥ ううっ…はっはっ…はぁ…っ

ちょっと…まって、わたし…今日は、なんだか……

くうっ♥ だめ、お願い、します…とまって…っ」

片足立ちの不安定な体勢で、自分の意志とは無関係に

下腹部が小さく跳ね、呼吸が乱れる。

ときどき、高く鼻にかかった声が漏れてしまう。

「ふふ、今日の奥さんはいつも以上にかわいらしいですね」
「なに…言ってるんですか……あっ♥ん、ちゅっ…あ…んくっ…」

反論する口を塞ぐようにキスされ、腰を押し付けられる。そしてそのまま円を描くような腰の動きに変えてくる。

「んんんっ！んっ♥…ぷぁっ…あっ！そのぐりぐりするの…だめ、です…っ」
（ニチャ…ヌチュ…）

前後に摩擦する刺激から、かき回しほぐすような刺激に変わる。同時に、アソコの入口にある敏感な場所も圧迫され強く刺激される。

「あっ…ダメ、いま、そこ…つまんじゃ…あっ、あっ!!…ふっ、くぅんんんっ♥」

ぱんっ♥
ぱんっ♥
ぱんっ♥
ぐぽぐぽ♥
ぐぽぐぽ♥
ぐぽぐぽ

「やぁ…♥　と、まって…っ　なんか、へん…で…っ♥」
「はあっ、はあっ…きもちよさそうな顔、してるね」
キスをした名残のよだれを引きながら息を荒げる私に、
耳元で言葉を投げかけてくる
「やっと私を受け入れてくれたのかな？」
「え…っ」
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
やぁ…
とまって…なんか…へん…で…
たしかに今日、私の中で何かをあきらめてしまった…
博司さんのために、この人との関係を
続けていくと決めたけれど…
『それだけで、こんなに変わるもの…なの？』
一突きごとに快感が増していく感じがする。
眠っていたものが目覚めたような…
知らない間に私のカラダが
作り変えられてしまったみたいな…
博司さんの秘密を知ってしまった直後に
こんなに乱れてしまうなんて…
『わたし、こんな…はしたない女じゃ…ぁ♥』

（ぱんっぱんっぱんっぱんっ！）
「はっ、あっ♥ あっ！♥ ふぁあっ♥
嘘っ♥うそ、うそ……
こんなっ…だめですっ！♥ ダメぇっ♥」
ぱんっ ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱぁ♥ぁ
あ♥
ぱぁ♥
うそ…
うそ♥
うそ♥
あ♥
ダメぇっん♥
だめっだめだめぇっ♥
いやぁやぁんっ♥
はぁっ♥
あぁあぁあっ♥
ぶるぶる♥
ぶるぶる♥
ぶるぶる

目の前がくらみ、大きな快感が全身を痺れさせる。
ガクガクと足が震えバランスが崩れるが、挿入されている
彼のおちんちんと、押しつけられた壁によって支えられた。
「ああ、あああぁ……♥ はぁ、ぁぁぁぁぁ♥♥」
『うそ……あたし…イっちゃ、った……の?』
「ふぅぅぅぅ……ははは。
はじめて一緒にイけましたねぇ、奥さん」
「う…ぁぅ……」
激しくイってしまったことを指摘され、
たまらない恥ずかしさがこみあげる。
『一緒に…なんて、ん…♥ 博司さんとだって…
ふッ♥ほとんど、ない…のにい……』

絶頂の余韻でまだ痙攣する体を支えるためか
無意識に彼にしがみついてしまっていた。

「よっ…と」

「う…くぁ…っ♥」

長く激しい射精を終えたおちんちんが抜かれ、
久しぶりにアソコから挿入感がなくなる。

（ごぽぉっ…ボトッ、ボトッ）

膣内に出された大量の精液が、股間や太ももを
ドロドロに汚しながら床に溜まっていった。

「今日の奥さんは今までで一番素敵でしたよ。
これからは心を開いて、お互い最高に気持ちいい
セックスをしていきましょうね」

その言葉に、私は何も返せなかった。

「では今日のところは帰ります」
珍しく、1回出しただけで今日は終わりとなった。
「いろいろお疲れでしょうから。ね」
『そう、ね……』
一人になっていろいろ考えたい気分だった。

「ではまた。今度はこちらから連絡します」
「…わかりました」
「ああ、別に奥さんが呼んでくれてもいいですよ。
あなたのためなら、いつでも喜んで来ますから」
「……私から連絡なんて、しませんよ」
「ははは、そりゃ残念だ」

(ガチャ…バタン)

「はあっ……」
シャワーを浴び終え、緊張が弛む。
ソファに倒れこんで目をつむる。
『博司さん……』
落ち着こうと最愛の人の名前を思い浮かべるが、
今日聞いてしまった話が思い出され、心がざわつく。
「ん…っ」
不意に腰がピクッと微かに跳ねる。
「わたし、なんで……おかしいわ……」
博司さん以外に初めてイかされたカラダは、
今もまだ落ち着かず……
履き替えたはずのパンツは濡れてしまっていた。
この日、下腹部の疼きはしばらく収まらなかった。

「うううっ…くそぉ…また、なんで……っ」
昨日、約束の最後の1回を果たした。
あの上司はしっかりと迅速にお金を振り込んでくれた。
その代わりに…また、育代とのハメ撮り動画を渡された。
半脱ぎで立ったままセックスがはじまる。
まるでベッドにいくのも面倒かのように見えてしまった。
お互い、絡みつくようなキスをして。
下から突き上げられ、甘えた声色で喘ぎながら。
最後はしがみつき、
同時に…体を震わせていた。
そして僕は――――
こうして自室で、涙を浮かべながら手を動かしていた。
「くそっ…！くそっ…！」
もう2度と育代を他の男に会わせるなんてしない…!!
僕が連絡しなければ、もう2人が会うこともないはずだ。
今もそのくらい育代を信じているし、
愛する気持ちは揺るがない。
でも…もう2回も最愛の妻が抱かれてしまった。
「育代が…育代が僕以外の男に…っ」
何故だろう…、そう思うと画面の中の育代が
妙にいやらしく見える。
それを見てちんこを固くしオナニーしている自分。
情けなさでいっぱいのはずなのに……
最近、性欲だけは昔の…
育代と付き合い始めた頃のように強くなっていた。

その後――――

以前のような生活が帰ってきた。

育代は何も変わらない笑顔で僕に接している。
まるであの動画の人は別人なんじゃないかと
思ってしまうほどに、自然だ。

上司とも職場では以前と同じように接する。
ただ、もう一緒にお酒を飲みに行く事はないだろう。
それなりに長い付き合いだが…もう、無理だった。

あの動画に関しては…何もできないでいた。
消すこともしていない。
育代に見せて問い詰めることもしていない。
もう終わったことなんだから、
今更すべてを明かして、言い合って…
喧嘩したって、いいことなんてない。

ただ、時々……
見返してしまうのは……
自分の失敗を忘れないため、だろうか。

先日、それなりに大きな仕事を任され忙しくなった。
出張も増え、家族に会える時間が減ってしまった。
これからはこんな状況が続きそうだ。
でも、あの事を忘れるほど没頭できる仕事で、
あの男と顔を合わせる機会も減る。
その点については願ってもないことだった。

そんなある日、
仕事を終え家に帰ると――――

「!?」
「!! あっ、博司さん!?
お、おかえりなさい♥」
育代がリビングにいた。
全裸で。
「なっ…なんでそんな恰好…?」
「えっと、ね。お風呂に長く入りすぎちゃ
身体がほてってるから涼しいのが気持ち
誰もいないし、いいかなって」
「ごめんなさ
あ、でももう
これ、飲み終
「いや、気に
慌ててカップ
僕は、そんな
釘付けにな

普段、家族の優しい時間が流れるリビングで。
明るいライトの下、育代の
やわらかそうなカラダが動く。
もう長いこと、生では
見ることがなくなっていた裸。
ズズ…
ゴクッ
ツン♥
たぷっ♥
今まで、何度も見たし、触
舐めたことだってある。
僕の妻なんだから当然だ。
でも家族としての愛が強
お風呂あがりの薄着をみ
そんな気分にはならなく
今、僕の股
あの動画
大きく固

健康的な肉付きの尻が揺れ
動画の中で、腰を打ち付け
いやらしく揺れていた尻。
挿入されて、突かれて…
僕以外の男に汚されていた

『あんな奴にこのお尻が…』
怒りと嫉妬のような感情

背を向けている彼女に声
僕は服を脱ぎ始めていた

「……？　博司さん？」
脱衣の音に気付いたのか、育代が振
「え？　…あっ」
リラックスしきった育代の目線が顔
それが、勃起したちんこを見て驚き

ぷりっ♥

むちっ♥

え？

あっ…♥

「え、えっ？　えええーっ!?　いきなりど
「育代…！」
「あっ！　博司さん…っ♥」
「育代、育代おっ!!」

テーブルに押し倒し
覆いかぶさる。
こちらに突き出さ
形のいい尻を揉む
その感触でさらに

「はぁっ！はぁっ！
「落ち着いて…ね
エッチしていいから

「うぁ…ぁぁあっ」
「あっ♥ ひろし、

強引に挿入する。
久しぶりに挿れた
ものすごい気持ち
風呂上がりのせい
熱く絡みついてく
しっとり濡れてい

2階で娘が寝ている
思い切り腰を打ち
テーブルがガタガ
気にする余裕はな

「はぁ、はぁっ！」
「あんっ、あん、あん
「くっ、はぁっ！　育
「あんっ♥　うんっ

『あいつなんかより
僕ほうがっ！育代

2人で気持ちよく
必死に腰を振り出

しかし異常に興奮
いつもより早く限

「くっ！いく、よっ…」
（ビュッ、ビュ…ッ）
「あっ……」
あいつとの行為に
勢いよく中に出す

「……落ち着いた
出したのに小さく
つながったまま、問

「ごめん、ごめんよ
「ううん、謝らな
っていうか、えっと
思ってくれたのは
「育代…」
「私の裸を見て、興
「ああ！した！」
「そっかぁ…ふふっ
「なぁ、もう一回、
「うん、いいよ……

優しく微笑みな
続きを催促する
とてもいやらしく
長い間セックスす
なかったのが嘘の
若い頃の性欲が
復活したような

結局この後、3回
勃たなくなるま

自分の妻として
不思議と征服欲
最っ高に気持ち

この日以来、育代と僕の関係は少し変わった。
家族のなかの「お父さん」「お母さん」の
僕たち夫婦だったが、2人の間のやりとりに
エッチなものが混ざるようになった。
さすがに娘の前で、表には出せないが。
この変化は、2人にとって
良いものだったと思う。

今日は自撮り写真が送られてきた。
かわいい笑顔とやわらかそうな
おっぱいの対比がエッチだ。
「お仕事がんばってね、か」
遅くまでの仕事が続く僕に、
時々ちょっとエッチな写真を送ってくれる。
そんな時は元気になりすぎて、
職場のトイレでシてしまったこともある。

「よーし!!」
早く帰って育代に
そのためにも、気合
仕事を片付けよう

こんな日もあった。
んっん～
♪
「ふんふふ～ん♪ んっんふー♪」
「ただいまー」
「おかえりなさい、博司さん♥
今日もお仕事お疲れ様」
「あれ？ その恰好…」
台所で洗い物をしている育代を見て、
すぐに違いに気づく。

「あはは…こういうの、今までは
恥ずかしくてできなかったんだけど、
どう、かしら。興奮する？」
あはは…
どうかしら？
裸エプロン。
新婚時代ですらしたことがなかった。
実は僕も一度してほしいとは
思っていたけど言えずじまいだった。
たぷん♥
ぷりっ
「うん
「あ…
股間を
満足そ

そのあとは当然、することになった。
台所の隅に育代を押し倒してのエッチ。
「あぁっ♥　素敵よ、博司さん…っ♥」
「育代っ！　愛してる、育代！」
「あんっ、あんっ♥　どう？　気持ちいい？」
「ああっ！最高だよっ！はあっ！　はあっ!!」
「ふふっ、よかった…♥」
あんっ♥
んっ♥
あんっ♥
ぷるぷっ♥
たぷっ♥
覆いかぶさって本能のまま腰を振る。
キスをしながら、気持ちよくなるために
出し入れする。
「んっ、んっ、んっ♥　あんっ、あんっ♥」
育代も気持ちよさそうに
腰を合わせてくれる。
ちゅぷっ
ちゅぷっ
ぱちゅっ
ぱちゅ
ぱちゅ
ぱちゅ

「うっ、出るっ！うううっ！」
「……」
（ビュッ、ピュルッ）
育代にじっと見つめられながら
たくさん射精する。
……
ニコッ
ジーッ
ふふっ♥
ビュッ
ピュルッ
ぶるっ…
ぶるっ
「はーっ、はぁーっ…」
「ふふっ…また襲われちゃった♥」
いたずらっぽい笑みを
浮かべているのがかわいい。

ちんこを抜くと、アソコから精液が垂れてくる。
「また…こんなにいっぱい中に出しちゃったな」
「ん……そうね。でもこれくらいなら平気よ、きっと」
「まぁ…できちゃってもいいか」
「博司さんったら、もう…♥」

おつかれさま♥

きもちよかった？

興奮して自分勝手に動いたのに、
冗談を言い合い優しく笑ってくれる。
今日はもう一回くらいなら
イケそうな気分だった。

ちゅぽっ♥

トロッ…

ぴく

ぴく

びくっ

と、まぁこんな感じで、僕たち夫婦は
また恋人のような情熱をとりもどした。

育代が他の男に抱かれてしまったことは辛かったけれど、
あのおかげで今のような関係になれたと思えば、
これはこれで良かったと思う。

これからは育代を寂しがらせないように気を付けよう。
そう心に誓った。

そして。
充実した日々が過ぎていった。
夫婦生活は良好。
仕事もうまくいっていて、不満をあげるとするなら
出張などで家を空けることが、以前よりもさらに
多くなってしまったことくらいだ。

「あれ？」
出張先のホテルにいる僕に連絡が入る。
画面には、最近見る機会がなくなっていた
名前が表示されていた。
『……なんだろう？　会社で何かあったかな？』
もうあまり関わりたくない相手だったけれど、
仕方なく確認する。

「やぁ、久しぶりだね。
元気に働いているかな？

突然ですまないが、君にも深く関係する話
なので連絡させてもらったよ。

話というのは育代に関してなんだが…
もう離れようと思われない程度には
私に対して愛着がわいてくれたと判断したので、
そろそろ教えてあげることにするよ

私と育代との関係について…ね」

「実は君には内緒でずっと彼女とは会い続けていたんだ。
例の約束が終わったあとも、ずっとね。
育代がセックスレスについて相談してきたので
男の悦ばせ方を教えてあげたんだ。
自分のせいで君が抱いてくれないと思いつめて
性技を学ぶだなんて、できた嫁さんだ。
部下の愛妻を
変えていくと
本当に素晴ら
君もその恩恵
わかるだろう

「ちんぽのしゃぶり方、おねだりの仕方、
オスを興奮させるための言動…
育代が知らなかったことを色々教えてあげたよ。
キレイなものを自分の色に
染めるのはやはり良い。
君も喜んでくれるね？
いや、喜んでいたね？
育代から聞いているよ。
とはいえ開発する余
君が全然手を付け
少しほぐすだけで
素質を持った女性を
信じられんよ……。
いや、ここは感謝す

「私のために育代の初体験をたくさん
残しておいてくれて、本当にありがとう。
調教を進める上での充実感や達成感、
背徳感をくれて、本当にありがとう
育代は全然飽
これからもお互
君はしっかり働
私はそれ以外の
して、君たち家

ああ、そういえば育代もそろそろ気づくはずだが…もうじきおめでたい事が判明するはずだ。
どちらの種かはわからないが、愛情をもって育ててあげてほしい。
君も愛している育代いることは間違い……無理矢理堕ちかわいそうなこと

「もし離婚して私にゆずってくれるというのなら、
慰謝料や手切れ金を払う用意はあるから
いつでも言ってくれ。
正直、今なら君よりも私の方が
育代を愛し、愛されているとさえ
思っているからね。
いままでの話を聞いて愛が冷めた
というなら、すぐに連絡をくれ。
待っている。
ああそうだ、それと――
もし以前渡した動画の
オナニーのおかずが欲
撮っておいた画像や動
遠慮なく連絡してほし
今はまだ君の妻なのだ

「おっと、
つい長くなってしまったね。
そろそろ時間だから失礼するよ。
待たせちゃ悪い。
じゃあ、君は引き続き出張を
がんばってくれたまえ。
せっかく私が上に君を推薦したんだ。
会社の期待には応えてくれよ？」

今日も出張先のホテルで一人、
ある連絡を待つ。
「……」
いつもの時間に届いた動画を
早速再生する。

「あっ！　もー、ちょっと待ってって…
ンッ…んん…」
軽く咳ばらいをして話はじめる。

「博司さん、出張お疲れ
今日は新しい下着をプ
から、博司さんにもお披
海外のランジェリーカタ
買ったらしくて、私もま
着たことないタイプなの

少しずつ上着がたくし上げられ
下着が見えてくる。
「……どう？　この時点で
ちょっとエッチなやつだって
わかっちゃうかしら？」
育代が話す通り、腰あたりまで
見える時点で明らかに
普通とは違う作りだった。
下着なのに、毛もアソコも
思いっきり見えてしまっている。
「おちんちん勃って
博司さんもこうい
好きだといいな」

「ジャジャ～ン♪
刺繍がとっても素敵だと思わない？」
「……」
画面の中では扇情的な姿をした
育代が楽しそうにしている。
「フリルも可愛くて、
おっぱいもきれいに
見えるようになっててね――」
「おまんこのところはすぐに
ハメてもらえるように、
オープンクロッチになってるの」
「ね、どうかしら？　博
おちんちん挿れたくな
こちらに話しかけるよ
言葉を続ける育代。
僕が見たこともない
特殊な下着を身に着
下品な言葉を使って

「うしろはこんな感じ。
すっごい食い込んでてエッチじゃない？」
「～～～～……」
「……あ！　そっか、背中はちょっと
びっくりしちゃったかな？
安心して♪ それタトゥーシールだから」
「私はあんまりこういうの
好きじゃないんだけどね～。
うしろだと自分じゃよく見えないし。
でも彼が試してみたいって何度も言うから、
ちょっとつけてもらったの♥」
「う……っ…」
すっかり変わってしま
僕の愛する清楚な妻
張りつめたちんこか

「もし博司さんもこの恰好の私と
ヤリたかったら、いつでも言って♥」
「まだかー？ 今回はこれくらいでいいだろ。
さっさとハメさせろよ」

「あ、そろそろ彼が
我慢できなくなっちゃったみたい。
それじゃ、今日もすっごいおちんぽで
いっぱいイかされてくるわね♥」

「今回は本番の動画は
だから下着姿を見て想
おちんちんシコシコして
愛してるわよ、博司さ
「あ、ああ……くっ！ う
（ビュー！ビュルッ！）

「今日は娘が友達の家にお泊りするので、
私もラブホにお泊りでーす♪」
「一人でお仕事してくれている博司さんには
今夜のおかずをプレゼントするわね♥」

「今日はぶっかけ動画に初挑戦するの。
博司さんもシコシコして一緒にぶっかけてね♥」
「はぁ…う…はぁ……」
「ちゃーんと狙いを定めて…ドロドロのザーメン、
いっぱいごっくんさせて♥」

舌を出しただらしない顔で射精を待つ育代の顔は
とてもわくわくして、嬉しそうだ。
「はやくぅ、あたひの口に、いっぱいらひて♥♥」
「あ――――――……♥」

「はぁっ…はぁ…はぁっ…！」
「あ―…あっ♥ ひたぁ♥♥」
育代の舌に精液がかけられていく。
つられて、僕の手の動きが早まる。

「あはっ♥ あっ…あっふひ……♥」
射精はまだまだ収まらず、
育代のきれいな顔を汚していく。
「くっ…あああああああっ！」
「育代…育代ぉ…っ！ いくぞ、でる、でるっっ!!」

「あっ…うあ、ああっ」
（ボトッ、ボタボタッ）
「んんん～～～～っ♥♥」
「今日のも濃すぎて…飲みにくい……♥」

「ドロッドロで濃いザーメン
いっぱい出たね♥」
「ごちそうさまでした♥♥」

「よーし、育代。録画止めてこのままヤるぞ。股開け」
「ええ～っ。今わたし目を開けられないのに…」
「俺が動いてやるから。ちんぽに集中できていいだろ」
「ん…まぁ、それなら……」

「あ、博司さん。じゃあまたね～♥」

お